

街道の歴史から、新たな歴史、文化、交流の創造へ 国際観光文化都市・日光市

日光市長 齋藤文夫



はじめに

栃木県の北西部に位置する日光市は、平成18年3月20日に今市市、日光市、藤原町、足尾町、栗山村の2市2町1村が新設合併して誕生した。市域は約1450km²で全国第3位、栃木県のほぼ4分の1に及ぶ。北西部の湯ノ湖、湯川、戦場ヶ原、小田代ヶ原が「奥日光の湿原」としてラムサール条約登録地となっているとともに、東照宮、二荒山神社、輪王寺の二社一寺が「日光の社寺」として

て世界遺産に登録されている。市の大部分が日光国立公園に指定されており、市内各所から湧出する温泉などの観光資源にも恵まれ、国内外から年間1000万人を超える観光客が訪れている。

日光と街道

ここ日光は、8世紀末、勝道上人による開山が起源とされ、霊峰・男体山を中心に山岳信仰の聖地としての歴史を持つ。鎌倉時代、政治の中心は関東に遷され、日光は幕府の保護を受けながら崇拜の対象となる。江戸時代に入り、幕府は交通、物流のために街道を整備した。この街道は人々の交流を生み、今の道路網の原点となっている。

江戸幕府の礎を築いた初代将

軍・徳川家康公の没後、3代将軍・徳川家光公は、家康公の遺言により江戸城から真北に位置する日光に霊廟として東照宮を造営する。東照大権現という江戸幕府にとつての絶対神を祀ることとなった日光は、幕府の直轄地となり、以来、歴代将軍による参拝も行われた。この参拝の街道となったのが、五街道のひとつ、日光街道である。徳川家康公400年忌となる今年、「日光東照宮400年式年大祭」として多くの祭典、記念行事が行われた。その中でも、徳川家歴代将軍が参詣した街道を歩く「日光社参ウォーク」がこのほど開催された。東京から日光までは約150km。まさに、「出立」した参加者は、全行程を連続7日間で歩き、それぞれに昔日に思いを馳せ

ながら街道の魅力を肌で感じた道中となった。

日光と各地とを結ぶ街道は他にもある。会津若松を結ぶ会津西街道、朝廷の例幣使が参じた例幣使街道、そして日光街道。この3つの街道には杉の巨木が並び、現在もその一部が当時のままの姿を残している。この杉並木街道は、国の特別史跡・特別天然記念物の二重指定を受けるとともに、世界最長の並木道としてギネスブックにも登録されている。

江戸の宿場町から、平成の中心市街地へ

この街道の結節点、交通の要衝となったのは今市宿。宿場町として栄えた今市は、現在は日光市の中心市街地としての機能を持つ。



明治15年ごろの今市
出典：『写真集 今市の移り変わり』今市市歴史民俗資料館

日光の湿原」としてラムサール条約登録地となっているとともに、東照宮、二荒山神社、輪王寺の二社一寺が「日光の社寺」として



悠久の時を感じさせる日光杉並木街道

平成23年、日光市は「生活、歴史・文化、観光のゲートタウンづくり」歴史・文化・様々な人が織り成す「日光の顔づくり」を基本理念に中心市街地活性化基本計画を策定。その中核施設として「道の駅日光 日光街道ニコニコ本陣」が今年4月にオープンした。この施設には日光市にゆかりのある作曲家・船村徹氏の記念館をはじめ、名産品、農産物の販売施設や地元の味覚を味わうことができる飲食施設などを備え、道の駅の機能を兼ねた複合施設となっており、歴史ある日光街道に新たな1ページを書き加える観光拠点としても市民の期待は大きい。

街道を軸としたまちづくり

国土交通省が進める「日本風景街道」(シーニック・バイウェイ・

ジャパン)は、地域住民や企業と行政の協働により、「訪れる人」と「迎える地域」の豊かな交流による地域コミュニティの構築、美しい街道空間の形成を図ることを目指す取り組みである。本市においては、市東端の大沢宿を起点とし、日光街道、世界遺産、いろは坂、奥日光を経て群馬県境の金精峠(こんせい)に至る東西に貫く52kmの街道が、「時空から天空への道」日光街道」として平成19年に日本風景街道に登録された。この登録を機に、街道周辺の住民団体とパートナーシップ協定を結び、街道の再評価、活用に向けた検討、清掃活動など、住民主体によるまちづくり活動が行われている。また、協働の取り組みとして、世界遺産に至る日光街道の電柱や街路灯などに番号を付した案内看板を設置。この番号とオリジナルの地図「日光まちず」

とが連携することで、現在地や目的の地までの距離などが分かることから好評を博している。

日光街道の終点に位置し、二社一寺の門前となる日光東町(ひがしちょう)においては、地域住民が「日光らしい」まちづくりを目的として委員会を発足。『日光東町まちづくり規範』を

発行するなど、こちらも市との協働による景観形成を進めることを目的に活動を続けている。

悠久の歴史と、街道の終点、結節点を持つ日光市。自然と歴史が響き合うところ豊かな輝く未来に向けて、市民と描くまちづくりの「街道」を、市民とともに一歩ずつ歩んでいきたい。

一口メモ

日光社参の道 日光街道

日光街道は、江戸時代に徳川幕府によって整備された五街道のひとつで、江戸日本橋を起点とし、日光坊中に至る街道。

江戸から徳川家康を祀る日光山に至る主要道路として東海道に次いで整備され、寛永13年(1636年)に開通した。

道中には、当時21の宿場が置かれており、日本橋から宇都宮までの道程は奥州街道と共通であった。この区間には元々古道奥州道があり、新道の開通により日光街道になったとされる。

日光街道は世界遺産「日光の社寺」へと続く街道。国内で唯一特別史跡と特別天然記念物の二重指定を受ける「杉並木」も広く知られている。



企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」



地図「日光まちず」と案内看板の連携の取り組み